

西谷啓治の「根源的構想力の発動」について

About Keiji Nishitani's Concept of "Action of the Primordial Imagination"

小野 真

要旨 西谷啓治の晩年の論文「空と即」(一九八一年)においては、西谷独特の構想力(imagination)論が展開され、彼の仏教哲学的境位である「空の立場」は「image」に映され、「空」は「根源的な構想力」の発動によって現実化するとされる。本論では、この「根源的構想力」の構造を同年代の大谷大学講義などもてがかりにして明らかにする。

キーワード 構想力、空の立場、事々無礙法界、局所性(locality)、西谷啓治

一、問題の所在―「空」を映す構想力

西谷啓治の晩年の論文「空と即」(一九八一年)では、詩歌という芸術形態、すなわち構想力(imagination)の働きによる複数の「image」の微妙な統合態において、「空」を体得した禅僧たちの境地をそれらに「うつす(移す―映す)」営為が踏み込んで論じられる。いわば「情意のうちの空」ともいべきものがクローズアップされ、「空」をより適切に指し示す「image」を産出する「構想力(imagination)」と「空」との関連に焦点が向けられている。

西谷の宗教哲学の根本的立場は、周知のとおり「空の立場」である。主著『宗教とは何か』(一九六一年)に収録された論文「空の立

場」では、「一切のものと我々自身とが相共にリアルな疑そのものになる」(10: 154)⁽¹⁾ 過渡的立場である「虚無の立場」を経て、さらに「空の立場」へ至るプロセスが説かれる。「虚無の立場」は「あらゆる「存在」への絶対的否定であり、従って存在と相対的である」(10: 155)。その「虚無の立場」を主体的に自己自身へ引きつけた、主体の脱自的な超越の場である「空の立場」は、「絶対否定が同時に、大きな肯定であるような立場」であり、「空の立場の根本は、自己が空であるというよりも、むしろ空が自己であるということ、「もの」が空であるというよりも、空が「もの」であるということに存する」(10: 156)。

『宗教とは何か』では、このように自己が「虚無の立場」を経て「空の立場」へ至る過程や、「空の立場」での本来的な「もの」のあり

方が説かれるが、「空」という境位を感得しうるのはどのような能力であるのか、それは最も適切にはどのように表現されうるのか、という点については主題的に取り上げられていなかった。それゆえ、「空の立場」といってもなにか彼岸にある超越的な境地のようにも思われ、宗教的救済の要求に直接に応えうるものとは言い難かった。「宗教とは何か」における西谷によれば、空の場における「もの」自体の会得は、「感性や理性からは把握され得ない」「もの」自体のリゼーション（現成即会得）と「いつことである」（10：157）とされる。つまり、少なくとも、感性や理性といった単純な人間の能力の枠組みでは、「空の場」は把握できない。

構想力についても、西谷はこの時点では次のようにいつている。「世界に有るすべてのものは何等かの仕方でも互いに結びついている。他のものと全く無関係に成立しているものは一つもない。科学の悟性はそこに自然必然的な因果の法則を考え、神話や詩の構想力はそこに有機的な生ける繋がりを感得し、哲学の理性はそこに絶対的な一を観る」（10：167）。空の場において本来的に成立している「もの」どうしの相依相即関係（回互的關係）について述べた一文である。確かに、「神話や詩の構想力」への着眼があるが、「科学の悟性」、「哲学の理性」と並列的なものであり、それぞれの能力の限界の限りにおいて回互的關係を感得することが述べられるに留まり、構想力にこそ「空」のリゼーションの中核があるという後の「空と即」の着想にはまだ至っていないことを読みとることが出来る。

これに比して「空と即」では明確に「空の場」が表出されるのは、「『事々無礙法界』といわれる処からの、根源的な構想力の発動」（13：160）によるものとされる。「空の場」の感得や表現について、

従来の人間の魂の能力に分類の枠組みでいえば、理性や悟性あるいは感性そのものではなく、構想力が中心的な役割を果たすことが明示されている点が目される。しかし、この表現によれば、「根源的な構想力の発動」は、「事々無礙法界」という自己以外のなにか超越的な場所からの不思議な力の発動であるかのようにも解釈しうるようになる。この点、「根源的な」構想力は、通常の構想力とどのように異なるのかということが問題になる。そもそも、西谷は「空と即」を書いた時点において「構想力」をどのように捉えていたのか。そして、その構想力論を前提に「根源的な構想力」とはどのようなものであり、それが「事々無礙法界」から「発動」されるとはどのような事態なのか。本論では、これらの点について探求して明らかにしてみたい。

二、「空と即」における構想力論

論文「空と即」では、構想力の理解のために、西谷は、古来の共通感覚論を援用する。共通感覚については、アリストテレスが『デ・アニマ』などで論じたことが嚆矢とされるが、一般的には、個別の感官を超えてすべての感覚を統合する魂の能力として論じられる。我々は砂糖を見て、それを砂糖と認知するとき、単に白いものであるだけでなく甘いものとしても認知し砂糖の甘さを思い出す。白い砂糖は、甘さと統合されて我々に認知されるのだが、そのとき白さと甘さの両方を統合する共通感覚が前提とされる。そして、通常砂糖の image に、白さと甘さの表象やそれにもなう我々の情意が付着して認知されるために、共通感覚は image を生み出す構想力 (imagination) と深く関

連するものとしても論じられる。

「空と即」においても、伝統的な理解に沿って、共通感覚は「諸感覚の間における補完的な統合の根基」をなすものされ、「感覚が特殊な限定を受ける以前の (a priori な) 非限定性」と規定される。また、「視覚・聴覚等々の特殊性を離れた」、共通感覚自身に固有な本有的機能として「imagination (構想力)」の側面が挙げられる (以上 13: 154 参照)。そこでは、「受動的」である感覚というものの力 (受動する能力) のうちに、それと一体的に、含まれている如き心象形成の力 (13: 128)、すなわち共通感覚が含み持つ、感覚刺激から独立して image を形成する力そのものが構想力とされている。

ただ、「空と即」での構想力論は、「感覚知覚や感情や気分などのうちにそれらを規定する契機として現れている」「感性的・情意的なものとしての空」(13: 117) はいかなるものかという観点から論じられている。すなわち、「空」が image に映される、ということこそ前提として、その「空」の image とはどういうものか、という観点から捉えられている。それゆえ、「空と即」においては、image ないし構想力は、人間の魂の分析の結果析出された魂の能力の一契機としてのみ単純に捉えられているのではない。そこでは、image は、「空の場」の言い換えである「事々無礙法界」を情意の内に映しうるものとして根源的に考え直されている。ここに西谷の構想力論のオリジナリティがある。

二、事々無礙法界と理事無礙法界

では、構想力と深い関わりのある「事々無礙法界」とはいかなるも

のであろうか。「事々無礙法界」とは、元来、「理事無礙法界」と対になって華嚴思想の中で説かれる仏教用語である。西谷は、華嚴思想自体で説かれるこれらの仏教用語を宗教哲学的に再解釈して、「空と即」において提示している。本論では、この西谷思想における事々無礙法界の觀念に即して論じていく。西谷によれば、「事々無礙法界」とは「有と無、知と不知を包括し且つ理と事との回互的に相即せしめる如き「理法」の窮極する處」であり、「理」と「事」が相即する「理事無礙法界の脱目的な自覚の所」(13: 145) であり、理事無礙法界の「もともと自らの根底をなしていたもの」(13: 145) である。

では、そもそも理事無礙法界とはどのようなものか。西谷は「世界」における諸事物の関連から、次のように説明している。

「或るもの A が世界のうちに有るといふ時、それは他のあらゆるもの (B・C) の間でそれ自身の「ところ」を与えられている」(13: 136)。

「その「ところ」は、それぞれのものの「有」の徹底した局限性でありながら、同時に直ちに「世界」自身の一局所でもある。いはば「世界」の自己局所化としての自己表現である。万物の間の限りなく複雑な相互限定は、「世界」がその到る所において局所をもち、世界全体に涉つて局所化されているということである」(13: 137)。

「以上のような世界連関の構造を一即多、他即一という形式に当て嵌め」(13: 138) した場合、「一即多も多即一も、一と多の相即関係であるが、世界連関そのものは、今述べたように、これら二つの相即関係の相即関係である」(13: 138)。

「もしその「構造」を「一」とか「多」とかのような論理的形式の概念をもって把握し、言葉のロゴスに表現しようとすれば、「学」

としての知の立場が呼び起され、その立場は「科学」的な思量から「哲学」的な思惟にまで到るが、それだけではその連関は思惟し尽くされない。その思惟はその連関を「理」の世界として解明するが、現実に与えられた事実、情意を通じて実際に経験される外はないような「事」の世界には触れ得ない(10: 139)。

これらの言説から演繹されるように、世界の万物は相互に限定して、世界のうちにその局所を得ているが、それは世界全体の自己表現でもある。「一即多、多即一」および、それらの二つ相即関係が互いに転じあつて成立している相即関係が世界連関であり、この形式が「理事無碍」と呼ばれた「法界」のロゴスである(3: 139)。興味深いことは、世界連関を分析的に見て、言葉のロゴスで捉えるベクトルが「学」へと展開すれば、「空の立場」でかつて「神話や詩の構想力」と並列的にあげられた「科学」や「哲学」の思考であることが指摘されている。世界連関が上記の相即関係の相即という複雑な構造をしているとして、それを敢えて「言葉のロゴス」や「科学」的な思量、「哲学」的な思惟、すなわち「理」の秩序において触れ、表現された世界連関が「理事無碍法界」である。そして、「現実と与えられた事実、情意を通じて実際に経験される外はないような「事」の世界には触れ」うるのが、「構想力」であり、さらに「根源的な構想力」においては「事々無碍法界」に触れうることが示唆される。

「事々無碍法界」は、「理事無碍法界」が「理法」による世界把握の限界に当面し、「理」では触れ得ない「事」の世界があることを、「理」と「事」の相即において自覚するとき、構想力において立ち現われる。この意味で、事々無碍法界は、いかなる「理」も無化された不条理の世界であり、いかなる条理の枠からも脱せられた「渾沌の相

が現れている」ところであり、「全然の虚空」である。そこでは、「一切は荒唐無稽であるようなimageを含めて、すべてimageばかりである」(13: 152)とされる。このような不可思議な「事々無碍」という無碍の場のimage群を、西谷は、理性による知の立場である西洋哲学の立場からさらに一步踏み出した「般若智」の立場のimageとし、さらにそのimageの生成過程を、あたかも通常とは異なった過程を経るかのように、既述のように「事々無碍法界」といわれる処からの、根源的な構想力の発動(13: 160)によるものとする。

「空と即」においても、構想力は、基本的に知性と感性を媒介する人間の魂の能力として考えられている。しかし、「根源的な構想力」は、あたかも人間を超えた超越的な場である「事々無碍法界」から促されて発動するかのような表現で書かれている。いわば、人間の構想力がなんらかの形で「事々無碍法界」という超越的な世界と連動しているかのようにも読める。共通感覚論が実体的な人間の能力に即して具体的に論じられていたことと比べれば、「事々無碍法界」から発動される「構想力」という発想は、前提とされる存在論的基盤が異なるようにも考えられるし、むしろ緻密な人間の構想力の分析がどのように、この事態の理解につながるのか不明確である。

西谷は、事々無碍法界におけるimageの例として、「聖なるものや聖なる国」も妄想とみなすような「廓然無聖、本来無一物」といった禅僧たちの境地、あるいは、「正法眼蔵有時」の冒頭部分の記述される全く相互に無関連なimageの羅列、あるいは、泰龍禪師が快晴の日に風雪を見て、それを歌に詠んだ話などを挙げる。⁽²⁾これらのimageの産出は、「根源的な構想力」によるものなのであろうが、その具体的な過程がどのようなものなのかについては残念ながら、「空と即」

には理解の手掛かりを見出すことはできず、謎に留まっている。しかし、われわれは「空と即」と同時代になされた『大谷大学講義』（以下『講義』）においてその微かな手掛かりを見出すことができる。「事々無礙法界」からの「根源的な構想力」の発動とはどのような事態なのか、以下において『講義』に即して探索してみよう。

四、「局所性 (locality)」概念の展開

『講義』では種々の宗教哲学的なテーマが扱われるが、晩期西谷独自の主体概念である self がそれらのテーマを貫く縦系になっている。self は『講義』に現われた晩年の西谷の「生」の概念であり、日本語では「それ自身」(24: 154)、「自己」(24: 391)、「広い意味の自性」(24: 211)、「自」(24: 306)、「自ずから」(24: 306)という語に等置されている。概括的にいえば、self は「生」そのものであり、生物の体という「形有るものの全体の何処にでも行き渡っていて、しかもそれ自身は形をもたない」(24: 346)。有機体としての生物は、単に物質の寄せ集め以上のものであり、生物としての全体の統合そのものを成立せしめているものが self である。

また、self は身体を介して世界全体との関係を持つという意味において、西谷の身体論の鍵概念でもある。身体を介して self は、周囲の世界と空気や水、食物をやりとりして、self を維持している。この意味で身体は、self にとつては環境の一部であるが、self と有機的に一体であるがゆえに「内的環境」である。他方、身体がやりとりをする周囲の世界は、self にとつては「外的環境」といえるが、「生物にとつての外的環境、体を取り巻いている環境を延ばして行くと、全世

界、宇宙というところまで広がっていく」(25: 156)。身体は、個別として独立しつつも、全世界と相互関連の網の目において存在しており、身体において、身体と世界との相互関係性が表現されている。この点をとらえて、西谷は次のようにいつている。self が宿る身体において「世界が全体性として映っている。換言すれば、そこに〈世界が〉自分自身を現わしている、現われている」(25: 160)。self 概念を基礎とした西谷の身体論の重要な帰結の一つは、身体において世界の全体性が反映されている、ということである。

生を持つ存在は、ある空間に石ころが並置されてあるという在り方ではない。身体を介した絶えざる外部との交通において、つまり関係性において存在している。昭和五十年講義の言葉でいえば、「すべてのものの相依相入」(24: 335)、あるいは「お互いに支え合って、存在そのものの中に他のものの存在が映されているとか、represent されている」(24: 336)という仕方での在り方をしている。この論点は、「空と即」(一九八二年)と同時期の昭和五十六年度(一九八一年)の講義において、「局所性 (locality)」、ないし「localization)」の問題へと洗練される。「銘々が自分だけの世界を持っていると言えるのも、個々の人間を取り巻く大きな世界というものが有って、自分はその中に住んでいるという事、そして、その大きな世界が個々の「われ有り」という存在の中に投射されて来ているという事によるわけで、そういう意味での世界というものが一つの問題になるわけです」(25: 385)、と上記の議論を引き継いだうえで、西谷は次のようにいう。

「簡単に一言で言うると、「広がり」というのは、一般には漠然とした抽象的な空間を表しますけれども、「もの」の存在そのものに含まれている空間性、近頃の言葉でいえば、局所性 localization と言うか、

つまり何も無い広がりの中でそれぞれが空間的な位置を占めているという事、言い換えると、紙の上に何か「もの」をただ、置いたというのではなしに、或いは、鉛筆で点を描くといったようなことなしに、「もの」が有るという事自身、存在自身の構造の中にある一種の空間性、その存在が有る空間の中に位置づけられている、存在がそれ自身の存在論的な位置を持っているという事、そういう基本的な意味における localization・局所性という事、そういう事を含んで世界の空間性という事を考えないといけないのではないかと思います」(25: 386)。

ここでの「世界の空間性」とは、存在する「もの」が占める空間の総和という物理的空間性ではなく、「もの」と「もの」の有る場としての限りなく果てしない空間」であり、「存在そのものの場としての空間性」(25: 388)である。このように考えると、「もの」の器である世界そのものないし空間性は「もの」が有ると言うのと同じ意味で有るとはいえない。「虚空」ともいうべき、「そういう虚という事がないと実という事も実として成り立たない」(25: 389)。したがって、「人間が「われ有り」という在り方、(中略)そういう在り方をしている一番根本の処では、世界の中で、世界の中で虚を踏まえたと言いますか、有るとい言葉の尽きた処、(中略)虚空、「もの」の存在の基礎にあるそういう処を踏えて、存在している」(25: 389)。あらゆるものの存在はその根本においてその存在を超えた処、つまりこの「虚空」を含んでおり、「そういう場の上では全ての「もの」は絶対に相対的である」(25: 389)。このような空間性そのものが、個々の人間や「もの」の相対的な絶対性を超えた、本来の意味での絶対的なもの、「広い意味での神とか仏という事、つまり、世界をも自己を

も同時に超えたようなもの」(25: 390)が問題になる。

「空と即」においても、この「局所性」という概念は重要な役割を果たしており、上記の『講義』と同趣旨の議論が展開される。絶対的一として元来不相互である各自の「有」が、世界連関のパスベクトイブのうちでその「ところ」を得て、他の「有」との相互的關係に入ることを、「各自性をもった「有」が局所性をもった「ところ」として透明化される」(13: 138)と表現されている。これは「一即多即一」の世界連関の構造の言い換えであるが、ここで重要なことは、この「世界連関のパスベクトイブ」に立つことによって「有」はその内面ではば透明化し始める」(13: 141)とされ、このような「根本的な転位」は「根本的には、現実の「事実」そのものからその image への移行行きである。むしろ、「事実」のうちでそれと一体となっている image が、image 自身としての固有な姿を現しにくることである」(13: 141)と言われていることである。「世界連関のパスベクトイブ」のうちで起こる「根本的な転位」というのは、『講義』の言葉でいえば、「存在そのものの場としての空間性」(25: 388)が自覚され、他の「もの」とのなんらかの意味での関係性を持つことであるが、その世界連関が、単に並列的に「もの」があるというのではなく、なんらかの image 連関において映しだされてくるということである。この image は事実を廃棄して事実から遊離して代わりに突然現れるのではなく、上記の「空と即」の西谷の言説によれば、「元来「事実」のうちで一体となっているものであり、「image 自身としての固有な姿を現」すとは、その直後に「五感のそれぞれのうちで「共通感覚」としてそれと一体になっている力が imagination (構想力)として現れて来ること」(13: 141)と言い換えられてい

る。つまり、もともと「事実」自体が、潜在的に世界連関の image のうちで感得せられているのだが、その世界連関の image のうちでそれぞれの「もの」と「もの」の連関の部分が浮き彫りになってくるということであろう。砂糖壺とカップが並列に置かれているのを見た時、カップにコーヒーが入れられていることを確認すると、その砂糖はコーヒーに入れられるべきものとして image され、甘く、白い砂糖がコーヒーに入れられていて融けていく image がまだ砂糖壺に入っている砂糖から浮き出て来る。そこには、私と砂糖、コーヒーの連関―私は砂糖が入ったコーヒーが好きだという連関―が映し出される。

五、局所性の image と感覚性

ここでは、局所性が成立することと image、すなわち共通感覚を根基とする感覚性の問題との根源的な関連が示唆されている。この関連は、昭和五十六年度の『講義』で明確に述べられている。まず、「有」という事が同時に、有自身の場を持つ、しかもその「場を持つ」という事が一種の「有の開け」と言うんですか、「その所を持つ」という事」(25: 412)、『さらには「生きているもの同士がそれぞれ独立で有りながら、同時に、映し合っているという事」(25: 413)、『togetherness という関係について、「感ずると言いますか、感覚性ということの問題にすることができないかと思っています。つまり、生きている物は広い意味で身体というものを持っているという時には、そこに何か「感覚性」というようなものが含まれていると考えられます」(25: 413)と、所を持つということ、すなわち局所性という事柄と

感覚性の繋がりが指摘される。さらに、この感覚性の内容については、仏教の五蘊(色受想行識)を、アリストテレスの共通感覚を挙げつつ再解釈して、「想」が共通感覚の能力の一つの形態である imagination であるとする。「恐らく「想」というのは、あらゆる感覚の根本にあつて、感覚の根本の力であると同時に、そういうようにイメージを創る力という、そういう事ではないかという気がします」(25: 418)。そして、「色受想」を「感覚性」としたうえで、「感覚性の根本」というのは、何ものかを「映す」という事に成り立つのではないかと思われるわけですね」(25: 421)とする。こうして『講義』では、感覚性についての「映す」ということが、局所性の問題と直結して語られる。「個々のものは皆んな全体の中で所を得て、そして、全体として連関し合っている。つまり、「所」という中に世界が映っており、或る生きている物の中に世界が映っているという、そういうことが言えるのではないかということですね。前からそれを、「局所性」ということで言ってきたと思います。つまり、世界というものが一つの locality として、すなわち局所として「所」を持つということですね」(25: 421)。

「生きている物の中に世界が映っている」ということは、その生きている物自身が、外からみれば、世界の表現である、ということであるが、その生きている物自身からすれば、自分の locality は感覚性を媒介にして自覚されるということになる。つまり、self は、そのような局所性という self 自身の存在様式を「感覚性」において自覚する、ということが指摘されている。その重要な箇所を挙げておこう。

「そこで、問題は、そういう locality という中に「感覚性」という事も既に含まれているのではないかということです。つまり、locality

が locality として A の内に現れて来るということ、その事が、A なら A という生物が感覚を持つということなんですね。つまり、外の色々なものに対する関係がそこに感覚という形で現れて来るわけですね」(25: 422)。

「局所性」と「感覚性」が呼応するという指摘には、やや唐突の感を否めないが、この着想は非常に重要な意味を持っている。生きているものは「局所性」という在り方で世界全体と互いに映し合っているとされるが、現実的にある個体が生きているということの過程でどのようにそれが実現しているのかということを考えれば、まさに内的環境としての身体と外的環境との結節点である感覚性の問題になってくる。身体は「世界全体の開けの局所」(25: 423)であり、生きているものは、感覚性を通じて、外の世界とともに、外の世界に感応する自分を感じて受容する。生きているものの「存在の根本構造に感覚性」が結び付いている。この事態は端的に次のように語られる。「感覚というものは、外の物との関係の上に成り立つものですね。しかし同時に、それは、其の関係が A 自身の中に反映して、A が A 自身の内に自分を映すという形で成り立つわけですね」(25: 422f.)。

A が外の物を感じることそれ自体が、外の物との関係であり、外の物をどう感覚するかということを通じて、A はその感覚において自分をも投射しつつ見出す。外の物の感覚そのものの内に、それとの関係性における関係項の一つである A 自身の感覚がすでに含まれており、逆に A の自己自身の感覚が外の物との関係性の感覚を規定する、という表裏一体の関係にある。西谷の言うように感覚性の本質が共通感覚によって作り出された image であるならば、ある物の image には潜在的に自己の image が重畳しているのであり、自己の image が

ある物の image に現実化されているといってもよい。そして、自己と他の物との関係そのものの、さらには世界連関全体の image も、ある物の image に重畳している。構想力そのものには、世界連関全体の image をある物の image に投影させる能力があることが、西谷の議論から導き出されてくる。これが、おそらく「空と即」において言われた「透明化」の過程であり、物を「内から見る」ことを指していると考えられる。

六、事々無礙法界と根源的な構想力

西谷は感覚に与えられた直接知そのものをそのまま深めていくという方向 (cf. 13: 85) を根源的な真理として考えており、そのプロセスで、「理事無礙法界」である「世界の開けそのものを可能ならしめている絶対的な開けが、事々無礙としての「世界」」(13: 144) の自觉に到達することが説かれる。「事々無礙法界」とは「開けとしての世界自身の「世界性」」(13: 144)、「一物もなき絶対的な開け、全然の虚空」(13: 145) ともいわれているが、これは最も根源的な self と「世界」双方の image が相互に投影された表現であろう。「理事無礙法界」の「理」を構成しているのは self であり、そこには、世界を理解するべく「理」を構成している self 自身が投影されており、self 自身もなんらかの「理」に従って理解されている。「もの」の image から向背して、そこに含まれる「理」を自覚して、「理」としての自己と一如になるのがノエシス・ノエオース（思惟の思惟）である。それとは逆に、西谷のいうように、直接知から得た image をそのまま深めていき、その根底にある、いかなる「理」も排した無自性とし

ての自己の image に到達することが根源的な真理の立場とされるならばどうであろうか。その立場は、「空と即」に説かれているように、「理事無礙法界」にすでに潜在的に現れている「世界性」そのものの「虚空性」の image に到達していることになるだろう。それと、同時に、その「虚空」においては、自己もいかなる「もの」も、そしてそれらの連関であるいかなる「理」もすべて相対的なものであり、ことになるであろう。もし、その根源的にその「虚空」の image に到達した場合、「虚空」のうちのいかなる「もの」もすべて、その image には連関がなく、すべて不条理である「事」のみが原事実であることを自覚することによって成就されるのであろう。この自覚が「事々無礙法界」における無秩序な image 群の源泉となる。

『講義』では「生」としての「自性」(self) が「知性で把握される範囲の理法の体系では包みきれないもの」(25: 160) であることを確認したうえで、次のようにいわれる。「自性という事を徹底すると、それは世界と一つだから、つまり全体性としての世界がそこに映っているという事だから、自性は同時に無自性だということになります。世界という立場を空という場合、しかし同時にそれが無自性空だというのは、それが個々の事象、事々物々の事象の根本である。自性は、根本的に無自性であるということですね」(25: 162)。「事々無礙法界」の image は、無自性として自覚された自性 (self) の image の対応者である。「事々無礙法界」といわれる処からの、根源的な構想力の発動」(13: 160) は、自己以外のなにか超越的な場所からの不思議な力の発動ではなく、自性自身が空としての無自性であることを自覚した自性の構想力の発動、と考えることができるのではないであろうか。

注

(1) 『西谷啓治著作集』(創文社) からの引用については、(巻数・頁数)の略記号で示す。用いた巻は第十巻「宗教とは何か」、第十三巻「哲学論攷」、第二十四巻「大谷大学講義Ⅰ」、第二十五巻「大谷大学講義Ⅱ」。

(2) 『正法眼蔵』第二十「有時」の冒頭には「古仏言、有時高々峯頂立、有時深々海底行、有時三頭八臂、有時丈六八尺、有時拄杖扠子、有時露柱燈籠、有時張三李四、有時大地虚空」といった無関連な image の羅列が列挙される (cf. 13: 152)。また、明治初年の頃、井深の正眼寺に泰龍という禪師が成道会において、風雪もなく快晴であったにもかかわらず、「瞎却眼睛宇宙寬、霜風凜々骨猶寒、塵々刹々婦家路、雪裡梅香撲鼻端」と、満天の風雪を詠じた偈を詠唱したといわれる (cf. 13: 159)。

(3) 『講義』における self 概念の詳細については、拙論「後期西谷啓治の身体論—大谷大学講義より」(『相愛大学研究論集』第二十八巻、相愛大学、二〇一二年、収録) を参照。「空と即」にはしばしばにはわかには解説したい着想や表現が現れるが、それらは『講義』で平易に説かれている事柄に由来するものが多く、『講義』は「空と即」理解のための重要な手掛かりとなりうる。

(4) 「空間性」と「局所性」の違いについては、物質と「個体としての生物とそれを取り巻く世界とが切り離せない」有機体との違いが反映されている。昭和五十四年度講義第十四講 (25: 265, 269, 386) 参照。「局所性」は「ところ」、「有の開け」とも言い換えられる (cf. 25: 413)。